

# 川柳雜誌

第二卷 第三號

洛西丸秦  
牛馬リ



鳥乎

川柳雜誌 第二卷 第三號 (大正十四年三月十五日發行) 目次

眼高手低 ..... 麻生路郎 (三)

川柳の畑より ..... 林田馬行 (九)

柳の床柱 ..... 省二生 (四)

本事川柳 (一) ..... 武笠山椒 (一〇)

天下茶屋偶語 ..... 森田柳翠 (九) 零骨君を悼む ..... 橋本二柳子 (一五)

本社二月例会 ..... (三)

近作柳樽 ..... 麻生路郎選 (一六)

川柳略語解 (三) ..... 西原柳雨 (一八)

川柳禮讚 ..... 若林吐露棟 (二〇)

第六支那句會 ..... 葵豆詠 (四) 零骨追憶句會 ..... 葵豆、柳路 (一五)

川柳塔 ..... 馬行、花童子、助六、霞乃女、刀三、柳翠、松郎、かほる、幸堂、雅幽、二柳子、多聞 (一六)

柳風スポーツ ..... (その二) 森 市魚 (六) 井上信子 (一六)

無題(句) ..... 蛭子省二 (一六) 武笠山椒 (一六)

募花道 ..... 篠原春雨選 (一〇)

集旅費 ..... 柳川洲馬選 (一〇)

句除隊 ..... 龜井花童子選 (一一)

子守 ..... 關本雅幽共選 (一二)

近作 ..... 岩崎柳路 (一三) 麻生路郎 (一四)

編輯後の小集 (一七) 編輯後記

# 川柳雜誌

第二卷 第三號

近作

麻生路郎

新婚の多聞君に 三

知らぬまに靴がみがけてあるもよし  
膳の上にただうれしさの漂はん  
一寸したここにも妻は笑ふでせう  
すこし輪をかけて貧乏知らして來  
貧しさにだんだん仲がよくなつて  
下宿でもしてゐるやうな部屋の父  
肺尖へ武者小路から手紙が來



# 眼高 手低

麻生路郎

眼高手低のびたてびといふ言葉がありますが、私達わたしたちが川柳せんりゅうに直面まへいたしました時とき、殊更ことごとその感を深ふかういたします。

他人たにんの句くに對しては、もう少し句くが作れさうなものだと思おもひますが、さて自分じぶんが作句さくくして見みると仲々なつかまい句くは出来できないものであります。

○  
初心者しんしんしゃの多くは眼低のびたて手低てびであります。古人こじんの句くや先輩せんぱいの句くを澤山たくさん讀んでゐるうちに、いつの間にか眼高のびたて手低てびになつてまゐります。兎に角とにかく初心者しんしんしゃにこつて眼高のびたて手低てびは句くに對する一進歩いんぽだこ云いはなければなりません。同じく初心者しんしんしゃでありましても藝術げいぶ的てき觀照くわんしやう眼がんを持つてゐられる人は初めはじめてから眼高のびたての域いきに進んでゐられる方もあります。

しかし、そんな人達ひとたちでも矢張り初めはじめてから眼高のびたてのまゝころまでの手高てたかにはなれないものです。

○  
それは、さういふ譯わけかご申まうしますと、他の藝術げいぶ的作品さく品が堪能たんのうでありましても、川柳せんりゅうには又川柳せんりゅう獨自みづかみの境地きょうちがあり、約束やくそくがあるからであります。

それ等の約束やくそくを一通りひととおり呑み込んでからでなければ、その人の眼高のびたてだけの手高てたかにはなれません。川柳せんりゅうの畑はたけにあつて長い間苦くしんでゐるのは、その眼高のびたてが段々だんだん高たかくなつて行くので勢いきほひひ、いつでも手低てびであることを免れぬからであります。若し自分じぶんは手高てたかだなきと思つてゐますと、それは大きな間違まちがひひで、却かえりて眼低のびたてになつてゐる場合ばあひが多いのであります。これは作家さく家に取つて尤なほも危険けんけんなこころであります。

○  
いつまでも、手低てびを嘆なげじてゐる作家さく家の前まへには、必ず進歩しんぽがあります。それは一作家ひとさく家として常に研究けんきゆうし努力じゆりきするからであります。

す、然し自分の句はこれでもう立派なものであると考へたり、まあこれ位作れたら充分だなきと思つてゐるに、そこでその作家の力はびたり止まつてしまふものでありますからよく注意して眼低手低にならぬやうにしなければならぬと思ひます。

さつきも申しましたやうに、世の中には、はじめから眼高な人もありますが、そんな方に限つて作句をしないものであります。もし句作に忠實でさへあれば、ある程度の手高になれるのですが、さて作句して見るに、いふ句が出来ないごすぐに止つて了ひます。努力さへすればその人の眼高さも更に進んで行くことに思ひ及ばないのです。しかし、一寸した眼高な人は、自分の手低には少しも氣づかず、川柳なごは何でもないやうに思つてゐる人さへあります。そしてそんな人は永久に貧弱な程度の眼高さを誇つてゐますが、全然川柳を振向いて見やうごもしなくなるものです。

さういふ眼高の人は、所謂知識階級の人達に多いやうであります。これは何でも彼でも自分が持合はせてゐる少しの知識の範圍で判断し解決仕様にするからであります。そんなに自分では眼高の積りである、ほんごに句作に苦しんで来た人でなけ

れば、その眞實を掴むごは出来難いものであります。

私達は低い眼高から高い眼高に進まなければなりません。そして低い手低から高い手低へミ躍進して、絶えず一步先んじてゐる眼高へミせまつて行かねばなりません。

初心者の方には、眼低手高の方が無いごも限りませんが、それはほんの少しの間に限られてゐます。自分で相當の句が作れてゐし、その句の價値が全然判らないごは先づ無い筈です。まかりなりにも、これ等の句の中で、きの句が一番いゝ位の判断はつくものであります。多少標準が狂ふ場合もありますが、それは作者の自惚れが手傳ふからであります。

私達は眼高になるために、いろんな経験を経なければならぬのであります。いろんなものを讀まなければならぬのであります。手高になつたためには自己の句を充分に燃焼させるごにツごめなければならぬのであります。出来ぬ限りの推敲もしなければなりません。更に自惚れや小さな野心を棄ねばならないご思ひます。

眼高の天才、手高の天才は別であるが世の多くの川柳家にはこの知りきつた眼高手低ごいふごについて少しく思ひをぐらす必要はありますまいか。(三月十日夜)



# 川柳塔



林田馬行

日曜を半日父の膝にゐる  
世の中をいつそ法被で氣樂そう  
小さくとも一本立ちになれよ見等  
容れられぬ意見ばかりで淋しがり  
では矢張り貧乏人が多いかな  
ピフテキの忘れられたる物思ひ

灯を吹消すこも毒婦らし  
呼鈴が怪奇小説めいて來る  
心配をしだした母へ向き直り  
皆賣つたあまに片意地だけ残り  
腕組を残して女左様なら  
嫁よりも出世を先きにするめられ  
離縁して矢つ張りもこの厚司掛

好き嫌ひ解らぬ頃を口説かれて  
俯いて歩く時分が幸福だ  
是でいゝのかなと思ふ日が續き  
風邪だなき序に注意する電話

◇ 龜井花童子

三味線の初手は左の手を覗き  
母方に似てつゝ、ましい子に育ち  
吹雪く日の驛に意味ありけな女  
松竹へ這入つて母へ楯をつき  
小僧みな梅見の供に生返事  
兄さんの頼みのジャケツ縫ひ上げる

◇ 松本助六

伯母ちやんき用有りさうにへばりつき  
安い鯖長屋揃ふて匂わせる  
下駄の齒が抜けて娘の笑ひ様  
嫁入りに 脛一匹の嵩を見る

正直な男雲突く程に延び

◇ 麻生葎乃女

子を置いて朝湯へ來るも五年振り  
布子着て姿なんぞは何のその  
ヒヤシンスの音沙汰なしパンの事  
種子蒔いてゐるなき屋根の雀さも  
ほの暗い家に雲雀の聲を聞き  
吸物に木の芽のそはる暖かさ  
甲斐性ある婚に刑事の手が廻り

◇ 井上刀三

夢ばかり見て青春を瘦せてゐる  
支配人だけ思ひ當る事があり  
酔つてゐるなさるなき、取り合はず  
殺生な眞似を女に見て貰ひ  
いゝようにせよと言はれて戻つて來  
御身分の違ふ男を戀しかり

必要を感じて嫁を捜してゐる  
計劃を立てた安堵の酒に酔ひ  
酔ひしれて掴めば札の重からず  
執着があるのかあれで生きてゐる  
一步譲れば後のわびしさよ  
御主人を欺くまでに馴れました  
氣に喰はぬ男に主人してしまひ  
言ふか言はぬだけなり人も疲れてる  
友達を酔はして歸す雨ミなり  
もう飲まぬ約束をする麗かさ  
先方の立場になつてあきらめる  
さつきの嘘がもう暴れて來さうなり  
これだけの事は言はして貰ひます  
文明へ恐るゝ事の多くして  
貴婦人の戀に驚く事ばかり  
娘だけ話せる人にしてしまひ

研究をする子を母は不憫がり

◆ 黒木 莢豆

をぢさんへそつミ呉れたは貝のカケ  
木の芽喰やさびしい氣にもなるわたし  
天も地もちちくちちく晴れ渡り  
あぢさるへく黒猫くろねこがのびして日が暮れる  
幅廣い肩の淋びしい戀をする  
自動車自動車を兩方へよける氣にもなり  
商賣に馴れてあはてゝみせるなり  
稅務吏は意地まで添えてせり上げる  
苦しんでるればいいのぢやないですか  
若葉ふさふさ金比羅詣ふでしたし

◆ 岩崎 柳路

酒の味も知つて出戻り淋しがり  
詐欺破産顧問辯護士も有つたのに  
總本店もう賣切れの札を出し

寒い晩ひよろ／＼とした蚊を見つけ

司法室給仕朝日を頼まれる

學校の寄附も氣になる子澤山

◇ 森田 輝 翠

上女中碁盤の客に馴れてゐる

戀なればこそ看護にも厚かりし

叱られた眼にも寔木は親しまれ

受け流す返事は針の手が早し

近廻り探した上の保護願

慰めの一つにもなる石を投げ

考へてゐた程相手口利かす

◇ 塚崎 松 郎

フロックの客を丹前呼捨てる

しんみりミ仲居に話す母の事

あなたは色氣がないなミ云はれて居

親分にすまない事は知つてゐる

泣くなく／＼叔父はお前を信じてる

麗かさ實にもろ／＼の馬鹿者が

手の甲に女房老けてるやつれてる

元の通りの机の上にして迎へ

なぐさみに社長家族の事を聞き

事こゝに至つて嫁に貰はんか

圖書館ミ云へば解つたやうな母

忌中札子供に下駄を揃へさせ

引越した朝齒みがきの色に香に

ムットして持つた新聞読んでるす

入學が出来て四五日伯父の家

なに俺か俺はアハ、ミ横を向き

◇ 高橋 かほる

酒の名にしては忠勇野暮な事

忠勇は四角四面に酔はしそう

マツカーウィツチすつてんころりミぶつけよ

公園でふさあんバンがほしうなり  
エレベーター係りへ娘一寸惚れ

◇ 二木 幸堂

伊達目鏡シノダの湯気にはかきらす  
炭の手で煙る勝手窓を明け

◇ 關本 雅幽

如才なく家にありては君子なり  
一齊に押せば例れる柵なるに  
大臣を偉いさきめたのは君か  
まん中の旦那へ肩がもつれそう  
喰べる物遠慮するなと言ふ旦那  
命懸けて遇いに來たのに泣いて居る  
彼の山が霞むと巢立ちするのです  
成る様に成るささうなる浪花節  
西の風昨日も今日もまだ明日も

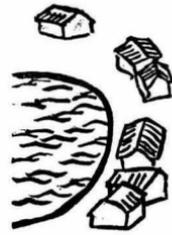
◇ 竹内 多聞

神前結婚（二月七日於阿部野神社）

土器に浸んで行く酒なり契なり  
眞白の足袋に鳴ります芦薙  
水干はきざはし三つ轉ぶなり  
固ふなつて座れば寒い神の前  
宮司立てば藤原鎌足さいふ型

◇ 橋本 二柳子

これだけの人であつたと思つて居  
だいぶんに揃つて居ます電話なり  
月給もやれない人を使つて居  
嫁までは兄さん兄さん書いて來る  
均一云ふ店だけの人だから  
男爵の庭へ宣傳ピラが落ち



# 川柳の畑より

林 田 馬 行

■「なんじ云つても矢張り柳樽の句がよろしおまん」ミ丁髷でも結ひたさうな表情をし乍らボンミ煙管をはたいて外に出るミ、そこには横暴そのものゝやうな電車が疾驅し、空には飛行機ミか云ふものが飛んでゐた。

■淋しがるな、哀れがるな、新しがるな、樂しがるな、洒落たがるな、おぎけたがるな、凡て己れを基調ミして進め。

■短篇小説を一句にしたやうな川柳を生まんミして私は苦しむ、そしてそれが徒勞に終る事が多い、斯うした時私を勵まし、私を慰むるものは、

太平洋に面して僕は莫迦でした 路郎の句である。

■講談俱樂部がよく賣れたり、互選の高點句がつまらなかつたりする所を見るミ平均した人間の頭の案外低い事が知られる。

■川柳の畑は、漫畫の畑、喜劇の畑に當てはめるものでなく、繪畫の畑、劇の畑に匹敵するものでなくて何であらう。

■古川柳も某誌で主張する川柳も、某々誌で主張する川柳も凡て皆川柳の一部分なのだ、只是等の川柳を區別するミすれば、いゝ川柳ミ悪い川柳ミに別れる丈だ

■ミ作を獎勵する、黙つて靜かに多作する事を獎勵する。

■柳翁の辭世句もさうやら怪しくなつて来た、川柳の考證、また難い哉。

■閨秀作家の殖むざるを慨嘆する川柳家よ。慨嘆する前に先づ、己れの妻を川柳家たらしめん事を。

尙又私ミしては、川柳家が「太鼓持」や「獨り者」や「居候」や「後家」の句を喜んで作つてゐる、いや作つてゐたミ云ふ事も、一因ではなからうかミも思はれるのである。

■無線電話が流行し出す、處々に一ガロン、八十八錢ミ書いた赤い異様なものが現はれ出す、斯うして時代は少しづつ變化して行く。我々は我々の時代の川柳を作つてさへ居ればよいのだ。

■人間は生れ乍らにして幾らかの矛盾を脊負つて來てゐる。その矛盾を出来る丈小さくする事に努めるのが人間ミ生れたものゝ義務ではなからうか。

私は今冷やかに柳壇を凝視めてゐる。



# 本事川柳 (一)

武笠山椒

古川柳はわかりにくいものさ一口にいふ中でも、古今かはらぬ人情を穿つたもの、古来著名な人物事件をよんだもの杯はわかり易い。一時はやつた物ミが事ミか、時事問題ミかいふやうな題目を捕へた句になるミ、大分わかりにくくなる。其の事柄が文献にも残らず、口碑にも傳はつてゐないミ、いよく分らぬのであるが、中には、斯ういふ場合に斯ういふ句が出来たミいふ様に、文書に載つて居るのがある。そんな句を集めて見たいと思つて、本稿を書きはじめたのであるが、元より淺學寡聞の私、面白い材料があつたら、讀者諸彦からさうぞぎし／＼

補つて戴きたいのである。題を本事川柳としたのは支那の本事詩に取たのである。先づ手近にあるものからいふので、塵哉翁の巷街贅説からはじめぬ。

(一)ひた船をおつたがヲロシヤ遺恨なり以下十三句、巷街贅説一「文化四丁卯年ヲロシヤ船來」の條下。

通航一覽二八四卷「蝦夷地亂妨始末」の條に「今度魯西亞人亂妨の基を察するに、かれ積年松前氏に因りて通商を願ふ事しば／＼なり。既に寛政五年蝦夷地千モロに渡海の時、官より御目付石川將監村上大學を松前に遣はされ、此地外國の事を聽くべき地に非ず、願あらば肥前國長崎港に到るべき由を諭さしめ給ふ。時

## ▲川柳禮讚

若林吐露樓

敢て川柳の提灯を持つわけでは無い。川柳が飯よりも好きだからである。川柳が戀人の様に懐かしいからである。

趣味のクライマックスは宗教である。或は氣狂ひであるかも知れない。信仰を基本とした宗教、夫れは氣狂ひミ云ふ特別の文字を用ひても差閤々無いだらう。

飯よりも好物の川柳、夫れは親の死に目にも會はないミ云ふ圍碁ミ五十歩百歩だ。共に趣味の極大であり、或る一種の氣狂ひである。

段々ミ川柳の氣狂ひが増加する傾向がある。嬉しいでは無いか。併し親の死に目にも會はないミ云ふ様な非人間味の者はほない同じ氣狂ひでも少し違つてゐる。

に願によりて信牌を與へ、もし其の地に  
至るも、書簡等は持渡るまじき由を諭  
し歸帆せしむ。然るに文化元年九月、使  
節長崎に渡來し、書簡及び土宜を捧げし  
事等を譴責し、異國通信は國禁の由を教  
諭し歸帆せしむ。此時使節の心中實に本  
意なかりしなるべし。』

『句はむだ船』をむだ骨にきかせ。追つ  
たを折つたにきかせたのであらう。

(二) 夫見たかなきご松前まけをしみ

(三) 松前は疫病神でかたきうち  
文化四年三月、松前志摩守章廣、國の政

道正しからざる趣で陸奥の地に移され  
そのあとで此の騒ぎは起つたのである。

(四) だこいつて今交易もゆるされず

當時の幕府の狼狽加減を嘲つたもの

(五) 急病の外に御醫師の急飛脚  
通航一覽二八七に、『文化四丁卯年四月廿

九日、異賊またエトロフ島シヤナに上陸  
して、會所に鐵砲を打かけ、亂暴に及ぶ

よつて、函館奉行支配の士及び南部、津

輕兩氏の人數防戦し異人を撃取さいへき

も、防ぎ難くして、同島ルベツの方に遁  
み遂に函館に退く。云々ある記事の中  
に、當時シヤナの會所に居合せた久保田  
見達さいふ御雇醫師が急飛脚として函館  
奉行所へ急行し、逸早く事情を報告した  
事が載つて居る。

(六) 實々は矢張帆影も相見ゆる

文化四年六月十日箱館奉行羽田安藝守  
の注進狀に『西蝦夷地シヤリにも異國船  
五艘相見候由風説に御座候得共、未だ治

定不仕候由、追而可申上候』とある。此  
の句は、公文書の口調を借りて、此位な  
事にもびく／＼する當時の官吏を嘲つた  
のである。

(七) 急ぎ候程に箱館へ逃けおふせ

五三同じ場合、擇捉會所役人の意氣地  
なさを嘲つたのである。此の退却が中々

困難であつた趣は、通航一覽二八七に  
『文化丁卯松前異事録』を引いて委しく  
書いてある。

(八) 雜兵はクナゲツ島さ覺て居

クナジリ島のもぢり。誰やらの隨筆に  
あつた、ソツピリさいふ藥をソツタレさ  
覺へ違へて藥屋を尋ね廻つた、さいふ話  
さ同巧異曲さでも言はつか。(未完)

宗教に相手は要らない。川柳も同様だ  
たつた一人で呼吸し乍ら、心臓の鼓動を  
聞き乍ら、森羅萬象の間を横行活歩出  
來る。鉛筆さ一枚の紙があれば充分だ。

○ 川柳を作れ。川柳の前に宇宙の總ゆる  
苦しむも惱みも活動し得ない。勿論物價  
が騰貴しようが、普通問題が通過し様が  
痛い事、辛い事も無い。

○ 理屈を云ふな。宗教に理屈は無い。川  
柳を作るに理屈を云ふ必要が何處にある  
黙つて作句して黙つて楽しんでるればい  
いでは無いか。作句を發表する事夫れは  
勝手だ。

○ 既成川柳家であらうと、傳統川柳家で  
あらうと、革新川柳家であらうと各自の  
自由だ。宗教は總て自由だ。だが所謂順  
良なる風俗を感亂する徒輩があるさ承知  
しない。

# 本社二月例會

二月十四日  
於 端之坊

十四日夜二月例會を端之坊で催しました。參會者は路郎、松郎、溪花坊、刀三、百石、義矢滿、双柳、波郎、悠々、麥郎、かほる、秀哉、世間亭、放馬、わたる飯山、みのる、眠聲、竹榮、たもつ、一柳、佳鳴、不越、春三、山月、鳶步、久雄、飛水、幸堂、一路、二葉亭、東北、しける、一洲、雅齋、莢豆、馬行、助六、狐城の諸君と私とであつた。(○柳子記)

## 草 鞋 路 郎 選

わらんじを作つて納屋は雨に暮れ 飯 山  
出世草鞋をこわいものに見る 助 六  
わらんじがするめの様に落ちて かほる  
花道を京まで云ふ草鞋がけ 十字路  
すゝり泣く手草鞋をはかて居 一 洲  
わらんじは蓮を踏んで馬車を避け 溪花坊  
もう一度抱いて草鞋へ眼を落し 松 郎  
わらんじにくち足をはんち見せ 二葉亭  
早立の草鞋親分兒分なり 悠 々  
草鞋まで揃へ仕度の出来上り 廣 賀  
急用に草鞋をト手に履いて立ち 義矢滿

その土地の池へ草鞋を沈めたり 波 郎  
遠足の草鞋机の上へのせ 春 三  
巡禮の草鞋一層哀れなり たもつ  
ヤレく云ふ格好で脱ぐ草鞋 一 柳  
草鞋だけ履いて仕事は間に合は 喜 泉  
井戸端へ草鞋はズト通される 放 馬  
川止めに草鞋の足はさすられる 一 聲  
又しても草鞋に先へ抜かれてる 同  
母親に草鞋を履いた事があり 凡 平  
奥深く博士草鞋を印したり 同  
粟田口牛も草鞋をはきかへる 東 北  
文樂は草鞋一足を横に履き 同

親の代から冷たい草鞋だつた 莢 豆  
四五本のラムネと草鞋四五足と 同  
無難作につかみオイ草鞋 錢 松 雨  
絶景をほめて草鞋をはき替へる 同  
當分は戻らぬ云ふ草鞋履き 同  
草鞋をはいておかしい髭になり しける  
草鞋はく度に親分らしくなり 同  
近道の草鞋しつくり足袋に合ひ 同  
履きな草鞋だんく暮れ行き 同  
(人)東京の話草鞋 作つてる 溪花坊  
(人)草鞋を茶店は邪魔と吊り 一 路  
(人)だめぐり逢ふ草鞋を履かへ 春 三  
(地)今賣からしく草鞋が揺る 馬 行  
(地)切れ草鞋寝返りも流れ行き 濁 水  
(地)草鞋の音のみを聞く金次郎 春 三  
(天)そこらで草鞋の音で這ひ 悠 々  
(軸)誰が捨て草鞋が氷張りつめ 路 郎  
傳 票 溪花坊選  
傳票の上へ戀人おきり出で 路 郎  
おい給仕この傳票を綴ちておけ 一 路  
傳票の不審へ丁稚まで呼ばれ 百 石

傳票でこれから買ひに行けば晝 麥 郎

傳票へ重役は今旅行中 松 郎

傳票を書かずないしよに積り 銀 燈

指先へ傳票ふれただけで落ち 悠々

傳票を旦那四五枚おきにくり しける

傳票の上へふっわり五圓札 波 郎

傳票へ怒つたやうに書き続け 同

落書のまゝに傳票續ちられる 春 三

市役所で傳票持つたまゝ困り 同

傳票と車の荷物見比らべる 馬 行

汗を拭き乍ら傳票待つてゐる 同

帳面へ傳票はさみ退けにする 秀 哉

傳票の仕譯に机狭くなり 同

(佳)傳票をぞんざいに給仕 秀 哉

(佳)傳票の父の後へ一家族 波 郎

(佳)又損をした傳票が廻つて來 刀 三

(佳)傳票の裏へ皿數聞いてゐる 路 郎

(佳)歸るにあらず傳票四つ折り 波 郎

(軸)みんな嘘嘘の傳票檢事見る 溪 井 坊

戻つては見たが村はつきあはず 路 郎

荷車の村を出て行く音を立て しける

村を出る時は錦で歸る氣が たもつ

自働車がチヨイ／＼通る村に 秀 哉

二等卒でさうして村へ歸れやう 東北

村中で何んぞ知つてゐるのが坊主 百 石

陽が落ちてから肩入の村になり 義矢満

暮れて來て雀揃ふて村へ去に 助 六

長男の嫁は同村から貰ひ 双 柳

村中が寄つてもめてる寄附の事 佳 鳴

鈴成りの密柑をこつて呉れる村 麥 郎

特急の過ぎてまた聞くおさの音 雅 幽

いゝ空氣だけでだん／＼村に 悠々

學校の中から續く村役場 春 三

村へ來てからは閣下も土百姓 飛 水

改選の時だけ村へ戻つて來 飯 山

暮れて行く村へ水車の廻る音 二葉亭

鯉織り菜種の上を泳いでる 鳶 歩

壁のおちた寺の村になつて來る 馬 行

其村に國旗を立てる事が出來 同

馬の糞ふんでチラリミ村を見る 波 郎

雑草の中でチラ／＼村を見る 同

岐れ道日傘たゝんで村ミ村 山 月

村役場火の見半鐘の側に建ち 同

つぎあてたやうに文化の村に 茨 豆

まだあの村長が村長さんだよ 同

村暮れて觀音講の鉦ミなり 松 郎

狂人が死んで村中淋しがり 同

此の村の人ミ先生思はれず 一 柳

車窓から見る氣樂な村に見え 同

隣の村までは電燈點いてゐる 放 馬

僕の村汽車は素通りしてゐる 同

教 室 互 選

教室を出て一列に日向ほこ 路 郎

教室に先生の聲 疳ばしり 一 柳

先生が來て教室は咳になり 刀 三

教室の机を開ける音になり しける

教室の窓から海も山も見へ 二葉亭

村 互 選

豊かさは村一ぱいにしが咲き 溪花坊

道問へば村はずれ迄ついてくる 銀 燈

月の出た近所が僕の村だらう 眠 聲

教室は視學が来るこいふ掃除 百石  
 教室の外へ紙屑掃き出され 不越  
 教室の窓へ雀が来ては鳴き 秀哉  
 教室で見ると先生は別な顔 溪花坊  
 止むを得ぬ顔で先生這入るなり 世間亭  
 教室で先生廻れ右をやりかほる  
 教室の横を葬式通つてる 眠聲  
 繻帯の先生教室を遅れて出 飯山  
 馳足が聞こへ教室寒い事 春三  
 叱られてゐる教室がよく聞こへ 同  
 飛込んだ雀に授業わやになり 鷺歩  
 支那そばが来た。夜學笑ひ出し 同  
 算術の教室出るこホットする 飛水  
 教室の一人自粉つけて居り 同  
 教室へ赤い顔して遅れた子 義矢満  
 教室へ迎ひの傘の顔を見せ 同  
 早引きが教室の戸を閉めた音 悠々  
 教室の窓から家の兒を覗き 同  
 教室へ教師ハンカチ忘れて来 松郎  
 上級の騒ぎ教室からも聞き 同  
 教室のいまだ二銭が見つからず 波郎

教室を女小使ほやいて出 同  
 いざ清書こなるこ腰掛がたつ。馬行  
 教室で見ると白い雲青い雲 同  
 教室に針金の要る事が出来 助六  
 教室を背影にして卒業生 同

### 第六支部句會

一月廿五日午後一時

於六甲苦樂園長春樓

「山の句會はいつも上天氣だね」と唯れや  
 らが言つた「何分遠い所を來て戴くのです  
 から日和は充分上等にして置きました」と  
 答へた、實に麗らかな日和だつた。時々三  
 味の音が聞こえて來る、頬白が鳴く、さら  
 さらさ句箋がすべる、のんびりとした苦樂  
 園氣分といつた氣分が漂ふ、日没から靜か  
 な温泉に浸つて、またたく大坂灣の燈を眼  
 下に見下しながら歸途についた。  
 來會者は路那、美の作、刀三、島行、松郎、十  
 字路、放馬、卯之助、一郎、利二郎、蝶夢樓  
 みのる、眠聲、二柳子、古城山、黙蘭、の諸氏  
 と私とであつた(美豆報)

惠美須(兼題) 美の作選

釣竿に一本目立つ寶舟 十字路

賽錢を戎へ投ける心持 刀三  
 笹俵な事を惠美須はたのまれる 同  
 横顔を見るこ惠美須は笑つてず 松郎  
 大掃除までは惠美須の笹は無事 同  
 宵戎さうく／＼巡查後へより 古城山  
 脊の子を降ろすこ吉兆爺が落ち 同  
 すくはれた様に戎は笹に笑ひ 凡平  
 吉兆を頼み隣の宵寐也 同  
 初戎電車ここから歩かす氣 同  
 こつそりこ一人來てみる宵戎 馬行  
 賽錢も覗いて惠美須から歸り 同  
 吉兆の笹拂ひのけ拂ひのけ 同  
 すゝり泣き 古城山選  
 すゝり泣き父親一寸いらちだし みのる  
 すゝり泣き二人を宿屋苦勞がり 美の作  
 すゝり泣きをして籠の鳥をみる 袋中  
 すゝり泣き早鐵橋にさしかゝり 眠聲  
 打あけてから聞かすゝり泣き 二柳子  
 すゝり泣くらブシーンと披露 黙蘭  
 すゝり泣きと弱きわれなりし 十字路  
 すゝり泣き風は益々吹き募り 同

心外な顔でみしゐるすゝり泣き 馬行  
 すゝり泣き嚴格すぎる父を持ち 同  
 すゝり泣き愛人いふ名を貰ひ 路郎  
 左遷される教師へすゝり泣き 同  
 すゝり泣きさうしても譯云はり 松郎  
 すゝり泣き煙草の煙へ顔をよけ 同  
 後れ毛を嚙んですゝり泣き 刀三  
 すゝり泣き灰皿はまだ煙つてる 同  
 袖口がピアノにうつるゝり泣き 同  
 すゝり泣き顔を上げて誰も居ず 松郎  
 すゝり泣き乍ら臺所片づけろ 放馬  
 慰める術なく男窓に立ち 古城山  
 奉加帳 互 選

奉加帳馬鹿々々しく字がにじみ 同  
 奉加帳へ五錢五錢ならぶなり 二柳子  
 奉加帳にお隣りの人ついて来る 同  
 お隣りの通りにしこく奉加帳 路郎  
 奉加帳女中はかりでここはられ 同  
 臺所で叱られて出る奉加帳 古城山  
 奉加帳女中のむごい口を聞き 同  
 預つた儘返される奉加帳 同  
 奉加帳地主たつぶり墨をつけ 美の作  
 玉垣の隅に己の功名やつこ讀め 同  
 舊友で廻すこ決める奉加帳 同  
 筆の手の動くをみてる奉加帳 十字路  
 結果を立たうこもせぬ奉加帳 同  
 奉加帳ぞろ／＼こ這人來 同  
 おたつしやでなき筆奉加帳 馬行  
 面白く三人殖ゆる奉加帳 同  
 奉加帳風に吹かれて門を出る 同  
 奉加帳本宅こして女女子 松郎  
 奉加帳金は袂へ入れて去に 同  
 奉加帳女が待つてひまが要り 同  
 夜道 互 選

一人行く夜道マツチの箱を振り 美の作  
 手をこりて暗い夜道を只一人 利三郎  
 終點で降りて夜道に連ねが出来 古城山  
 折箱を提けて夜更けの街へ出る 放馬  
 月が出て夜道へ何か光るもの 十字路  
 追ひついた時提灯は横へ折れ 眠聲  
 もう夜道一人で行かぬ年になり 同  
 暗い道女給恩はぬ母に逢ひ 馬行  
 女の家の門から一人となる夜道 同  
 足音をばた／＼こ聴く夜道也 二柳子  
 提灯をみつつけて夜道いそぐ也 同  
 異見されたこを夜道で考へる 刀三  
 氣味悪るい夜道は無茶な唄にも 同  
 泣き言も交り夜道を送られる 松郎  
 夜道にこふ子の寝顔なき 同  
 子を一人夜道の人ここつける 路郎  
 灯が消えても夜道に藪があり 同

### 零骨追悼句會

二月廿四日午後六時  
 於 築港託兒所樓上

「はろ／＼として小兒科の扉をあけ」の作者  
 酒井零骨君の追悼句會が、築港託兒所樓上

で開かれた。水取りを控へた冷たい期節風がいやに裏つて物思はせるやうな寂しさで、故人を悼むにふさはしい夜であつた。この夜の篤志出席者は、路郎先生、古城山、一路、芦穂、輝翠、山月、眠聲、秀哉、欣遙子、しげる、飯山、一聲、双柳、松郎、二柳子の諸氏に、來阪中の松江、青砥不二綱氏も出席され尙追悼の意味を以て兼題句をはる。送つて來られたのは、神戸大休一休、平野郷松本助六、千舟中島黎明、遠く千葉縣酒井駒人、福島縣新島新坊、朝鮮石井竹馬の諸氏。(松郎記)

小兒科 路郎選

小兒科も診立肺炎かたるなり 喜泉  
 小兒科へ赤い朝顔咲いてゐる 眠聲  
 小兒科の先生世辭のありつたけ 一聲  
 下術する兒に母親を寄せつけず 双柳  
 小兒科へちゝ母親が言ひ過ぎる 不二綱  
 小兒科醫兒本の舌を出して見せ 義矢滿  
 小兒科で玩具忘れた事を云ひ 二柳子  
 小兒科の庭へ手毬が轉け落ち 秀哉  
 ねんねこをささぐ小兒科扉を出る 古城山  
 小兒科の應接にある主婦の友 助六  
 腹違ひなのを小兒科知つて居り 駒人

死んだ子をまだ小兒科は知居り 黎明  
 小兒科の裏で天リン教か鳴り 竹馬  
 まじないごいふを小兒科叱るも 松郎  
 小兒科を出て風一つ當らせず 同  
 小兒科醫可愛さうだが仕方なし しける  
 明答を避けて淋しい小兒科醫 同  
 小兒科の玩具にもなる聽診器 輝翠  
 容体を母親に訊く小兒科醫 同  
 小兒科へ今日は父親らしい人 欣遙子  
 もっ少し寐かせたい兒へ醫者が來る 同  
 小兒科で母は常着のまゝ話 同

五 客

小兒科で女同士の愚痴になり 義矢滿  
 小兒科へ従いて來た子の遊び 古城山  
 小兒科と昵懇になる子の弱さ 新坊  
 小兒科へ姑を呼ぶ事になり かほる  
 小兒科で中野の鍼のうはさなり 同  
 (人)小兒科へ來る父の子を貰ひ 松郎  
 (人)小兒科に椿一輪咲いてゐる 雲涯  
 (人)小兒科醫甘く育てると思ひ 新坊  
 (地)乳の張る小兒科で話合ひ 飯山  
 (地)活潑ですな小兒科困り 義矢滿

(天)小兒科へ廊をぬける若夫婦 竹馬  
 (軸)小兒科へ會社の時連れて 路郎  
 市 外 古城山選  
 くだびれた郵便の來る市外なり かほる  
 雑喉場から朝の市外へ戻つて來 秀哉  
 宿置が市外の火事に起される 路郎  
 川二つへだて市外に書く手紙 欣遙子  
 市内にも劣らぬ市外街が出來 一路  
 三越の馬車市外まで配達し 同  
 終点で降りて市外へ急ぐなり 二柳子  
 市外から見る大阪は曇つてる 同  
 市外鶴橋の方面委員書き 松郎  
 市外に住んで拾き取る頃になり 同  
 市外また學校の建つ噂なり 輝翠  
 未來ある様に市外は建ち並び 同  
 溝一つ越せば市外の感じなり しける  
 高架線市外の開け振りを見る 同  
 もう此處は市外と知れる木賃宿 芦穂  
 市外で宛名やつぱり露次に住み 同  
 消防車市外の小火に引返し 同  
 ◎ 畑と畑其所に市外の灯がこもり 輝翠

公休々女給市外へ戻つて来 路郎  
往來へ梗が出する市外なり かほる

會呂利の句芭蕉の句も市外 同

女學生 互 選

女學生三人集るこ笑ひ出し 山月

近眼鏡又替へてゐる女學生 秀哉

女學生度胸をきめてピラを撒き 一路

卒業を待たして嫁ぐ女學生 双柳

釣皮でよく喋つてる女學生 一聲

女學生遠廻りして友の家 しかる

女學生きつさだつせこ右左 同

公園に一かたまりの女學生 同

角帽の兄さんを持つ女學生 芦穂

満員を笑つて降りる女學生 同

女學生男優りな事も言ひ 同

結婚の噂が高い女學生 不綱

女學生シヨールを膝で蹴つて行き 同

女學生遂に理想を裏切られ 同

道寄りも友を連れてる女學生 踏郎

女學生にいの連れこそ違ひ 同

女學生もらつただけは塗ける 同

可愛い子に女學生同士袖を引き 松郎  
女學生母に恩給下つてる 同

早うから馬をよけてる女學生 同

ふられ客 互 選

ふられ客今度はあれにする積り 双柳

ふられ客向ふにすればけちな客 一路

ふられ客こんきは酔ふて出る氣 芦穂

口ぐせに歸るくこふられ客 一聲

ふられ客空で電車で物足らず かほる

ふられ客つまづきかけて立止 同

裏梯子三度降りるふられ客 古城山

ふられ客トンビを着たり脱ぎ 同

街はもう餘程更けてるふられ客 しかる

ふられ客女將を呼んで大さうな 同

あんなまご二度三行かぬこ客 眠聲

ふられたか今朝は早うに戻て來 同

もてたこも云はねば話こも云は 同

ふられ客炬燵を少し押ししてゐる 松郎

ふられ客あんないくつ聞かせる 同

ふられ客まあまん中へ寝てし 同

ふられたこ見へておつてもや 踏郎

すしまでも買はされたのに居 同  
寫真だけやうく呉れたら 同

金持 互 選

金持の方へやりたい娘なり 欣遙子

金持へ替るくこ下女は云ひ 山月

金持のざま碁に今日も負けて 秀哉

金持の犬に噛まれた騒がしさ 芦穂

金持は鯛のうろこをよく散らし かほる

悪口は何ほでもきく金を持ち 双柳

骨董に又欺惑される金を持ち 同

金持に金持損をした話 眠聲

大阪の又金持かこを買ひ 同

金に満足して米國から歸り 輝翠

金持つてもう郊外へ住みたがり 同

金持の倉へ夕陽が射してゐる 飯山

金持は強盜の記事怖く見る 同

寄附のこごで又金持はうらま 踏郎

金持をにくむ思想を息子持ち 同

貰ひ子もせずに金をば貸して 松郎

きかぬ顔をして金持坐つてる 同

丹前を着込み金持何處も出ず 同



# 川柳略語解 (三)

西原 柳 雨

其後又若干見當りましたから御披露致しませう。

抱て縫つてくんなこ一人者(安永四)

けうはあけうの約かと思はる其子供は私  
が抱いてあけうから一寸此縫を縫つて  
おくれならん。

お、おつか、こ刃物嫁か(安永九)

「借りて来てて、ち、ち、を嫁指南(安永  
一)」「うめんめへ上けうさ嫁は借りて來  
る(安永)」「なき猶外にも花嫁が御愛想  
に近所の小供を連れし來し遊ばせる句が  
幾らもあるされば此句も亦その類句にて  
小供の刃物なきを持つてゐるのを見騙し  
て取揚ぐる場合なるべくお、おつか、こは

お、怖ないの略であらう。

ぬかぶくで嫁か、こ迄こも也(安永七)

のぬかぶくは蓋しぬかぶくろの略

其あしたおきぎに困る嫁の顔(安永七)

先々號に「あぶりこのおきぎ教へて女房  
寝る」のおきぎは置所の略か疑を存  
して置いたが更に此句に接して殆んぎ、

疑を容ら、餘地はないこになつた婚

禮の翌朝に嫁か顔の置所に困るこはさも

あるべきこである。

おもしろくなのはお寺の鶯娘(安永七)

なのははないのは略なるべく眞白な振  
袖を着、傘をさして舞臺の上じ踊る鶯娘  
はたまらぬやうに面白いがお寺から白無

垢の女がニューなきは面白いさころか怖  
くて堪まらぬこの意ではないかと思ふ。

七所せつな笑をしてあるき (安永七)

此せつなも矢張りせつないの省略なるべ

く七所から賞ひ集めて初めて附けた初

鐵漿の禮に行つて冷かされたり調戲はれ

たりせつない笑ひをして歸るこの意であ

らう。

びくのゐる路次(浅黄)(安永八)

びくはびくの下略即ち安永天明頃淺

草其他各所にありて比丘尼と稱したる尼

の賣婦の巢窟を田舎侍が搜してゐる様

を云へる句じであらう。

い、かんにたべてしまやま(天明)

い、かんに作れし乳母へ抱て(明和)

い、かんにい、かんにい、かんの

略なるべく前號の「い、かんにだまりな

さいは内儀なり」のい、かんと同一であ

らう前句はよい加減に食つて仕舞へし母

親が飯に茶なき掛けてやつた場合なるべ

く後句は花見なきの出掛けに化粧して居

る乳母に大抵にして置かねへかこ子供を

連れて来た處ならん。

いたねぶさおぶしき人の青女房  
いたねぶさおぶしき人の略、板喋は長  
大なる東西のこころ、より以上説明は不用  
であらう此句は末摘花にある。

千年もいひおりにな放生會 (寛政)

いひおりはいひおくりの省略ではないか  
と思ふ千年に鶴を利かせて例の鎌倉に於  
ける新朝の放鶴を云へる句はすれば今一  
太々でいひおりになる恥をかき(明和)  
も駄勞解ではあるがこじつかぬこともな  
いやうである伊勢に參宮して太々神樂を

## ▲天下茶屋偶語

森 田 輝 翠

本社が川柳社會運動の烽火を上げてから  
一箇年の月日はさつかに流れて去つた。大  
正十三年は川柳が近年にない勢で勃興  
して來た年であつた。従つて川柳の價値  
がさうの革新川柳がさうの傳統川柳がさ  
うのさあちらこちで盛んに論議される

打つこなれば相應の入費もかゝる代りに  
随分鄭重な馳走を受けたものらしく夜具  
なまも中々綺麗なものであつたさ見わた  
『太々の夜具一人には惜しいもの』(寶曆  
) 『貰はれたやうに寝てゐる御師の宿』  
『太々の夜具一人には惜しいもの』(寶曆  
文化) なまも三つ布団を臭はした句があ  
る夫から『太々の連中薄茶か露所なり』  
(明和) 『云ふ句なまは慥にいひおりに  
成る耻を説明したやうな類句と思はる。  
物云ひにすこ癖のなる嫁を』(寶十二)

のを見せられた川柳もだん／＼難かしく  
なつて來て駄洒落半分ではさても作れな  
くなつたのは事實だお互ひにそれ／＼自  
分の立場もあり議論もあらうをして斯う  
した諸論の絶わぬところは一面川柳がよ  
く深く一歩々々掘り下けられて行きつ、  
ある證據は腦みある所に進歩があるのだ  
私は近い將來に吾々の望んでゐる川柳の  
黎明期が迫つて來て居るやうに思はれて

動もすれば知りんせんのだの、およしな  
しなき云ふ癖の出る嫁であるがすこはす  
こしの略語であるこ新しく説明する迄  
もなく例句は寧ろ多くて困る程であるが  
現代ではすこぶるの略語にしてすこ美人  
すこけちんほうなき云ふ風に用ゐらるゝ  
ここを聞くやうにもあるので川柳語のす  
ここ混雜せぬやう念の爲に云ひ添へた迄  
である。まだ外に疑はしきもの二三あれ  
ざら斷定する丈の自信がないので他日の  
研究に残しておく。

ならない。  
川柳を生むここよりもむしろむつかしい  
論議に花を咲かしてゐる人や、血眼にな  
つて騒いでゐる人々の中にまちつて私も  
私に與へられた川柳道の一隅を靜かに一  
歩々々進んで行かうと思つてゐる。道は  
遠い何處迄續くここやら……私には私の  
行き着くべき到達點が、私だけのもつ道  
が私を待つてゐる筈だ。

募

集

句

花道

篠原春雨選

花道を引づられてく女形千龍  
 花道へ上使の聲はひびくなり 一聲  
 花道で覺へてゐろこ捨せりふ 喜泉  
 花道をくの字に歩むいゝ氣嫌 案山子  
 花道で藝者の足袋は良く目立ち 眠聲  
 花道ですれあふて行く敵き役 薫流  
 花道を先づ辨慶が向き直り 鶯歩  
 花道へ警官が来る座主が来る 駒人  
 花道へ出たミ思へばお茶子なり 山月  
 七三へ來し書割の灯を見つめ 喜花  
 花道へさつきの車曳いて出る 吐露樓  
 花道のあおりを受ける土間の客 乾坤  
 間仕合花道へ出て幕になり 隻峰仙  
 花道であわたゞしくも申上げ 凡平  
 殿様は花道せまう供を連れ 廣賀

花道へ來たのを囃子見てるなり 同  
 花道に主従二人身をなけき 普天  
 花道へ思案しながら紙治が出 同  
 花道に奴の足が涉らす 山美  
 花道へ入れば舞臺伸上り 同  
 (佳)花道へ來き一人は耳を貸し 薫流  
 (佳)花道を今賣られ行く娘なり わたる  
 (人)花道で藝者の下駄の派手な音 廣賀  
 (地)花道の丁度向ふ茶屋が見ぬ 眠聲  
 (天)七三で殿うらゝ春を賞め 喜花  
 (軸)揚幕へ訥子ヒヨイクと人々 春雨  
 花道じうなづけは又唄になり 同  
 主従は來た花道へぞ下りける 同  
 新發意をそめに陣屋は幕になり 同  
 花道で手拭二つもつれ合ひ 同

(一〇頁よりの續き)

○ 親無し兒も育つ。自然の力は偉大だ。  
 兎や角云はずも川柳も育ちつゝある。  
 安心していゝ。態々車を横に押さなくて  
 も、雀や蛙の様に悲鳴をあげなくても大丈夫だ。

○ 宗教にも宗派がある。川柳にも宗派がある。だが信仰云ふものに異常さへ無ければ、何れの宗派に隸屬しやうが何れの題目を合唱しやうが善男善女に變りはあるまい。

○ 川柳が行きつまりつゝあるを慨嘆する一派の信徒諸賢よ。心配しなくともいゝ飛行機も潜水艦も發明した世の中だもの殺人光線も發明されやうとしてゐる時代だもの。

○ 川柳を作れ。古いとか新しいとか、過去とか未來とか屁理屈を云ふ閑があつた

# 旅費

## 柳川洲馬選

此の旅費で見ん母がちつこも 千賀女  
 二三度も國へ歸れる旅費をこり 喜泉  
 旅費位ひさうなまなるこ二階借 廣賀  
 驅落ちの一枚づゝが旅費に減り 猿公  
 切つめた旅費で土産を買ゝ來る 吐松子  
 行商を値切ゝ旅費を聞かされる 山月  
 月給は勿論旅費まで當にする 普天  
 宿代をざつこ残して旅費をよみ 山美  
 會社ゝ旅費が出るので行く氣也 柳人  
 若旦那氣になる程の旅費を持ち 花  
 わかり切つた旅費も會計をこみ 一路  
 家出した娘へ旅費を三手紙なり 一聲

# 除隊

## 龜井花童子選

除隊の夜まだ言ひ足る事ばかり 吐露坊  
 見覺の顔へも除隊一つ下け 同  
 除隊した兄に抱かれて嬉しそう 廣賀  
 丸腰になつて除隊の淋しすぎ 同  
 母親へ除隊優しい言葉なり 蚊十  
 除隊した當座は朝も早く起き 久樂

久し振り旅費はつかりで歸らぬ 眠聲  
 友達がよつてたかゝ旅費が出来 凡平  
 幾らかの旅費をたよりに父の仇 駒人  
 旅費だけは女の方で工面する 同  
 寢臺車旅費を氣にせぬ眠り様 しける  
 旅費を支持し乗切りするつもり 同  
 支配人合點のゆかぬ旅費を取り 吐露樓  
 ローマ字のこじ丈云はる旅費 同  
 旅費なんか考へてない展望車 同  
 (人)軽くなる財布に旅を淋し 乾坤  
 (地)新婚は屈託のき旅費を持ち 吐露樓  
 (天)白粉の香にひきまゝ旅費の内 しける

出迎への人へ除隊は手を舉げる 狸蒼  
 軍服の寫真除隊の土産なり 同  
 除隊日に週番下士の世辭を聞き 志貴南  
 靴摺れの癒らぬまゝで除隊なり 木屑  
 上官を敵づつたかきで除隊延び 一路  
 盃が出来て除隊を待つばかり 凡平

ら、其の間に二句を作れ。一攫千金を夢見す、一步一歩堅實な地盤を作れ。

堅實な地盤の上に咲いた花は、雨や風の爲に仆される事も傷付けられる事も無い。十年や二十年の短時日に満足出来る川柳教が出来るものか。根底を先づ作れ

ローマは一日では出来ない。後代、大正文學の一つとして誇るに足る川柳が、芽をふき出した現在に於て行き詰まつたなきは笑止千萬、地球は未だ健在だ。

傳すにも一つ云ひたい事がある。夫れは『課題吟』の問題である。廢止するかせんか誰か云ひ出したのだ。課題吟を廢止しようとする理由が聞きたい。

除る課題に拘足せられて、句が伸び得ないからだ。云ふ理屈で課題吟が嫌なのなら、嫌な御方は止めてい。課題

バスケット提けて丸腰驛へ来る 愚劣  
營門を包み切れない顔で出る 同

除隊日の額の白き目立つなり 助六

# 子守

○ 雅 幽 選

泣き止まぬ子供へ子守泣いて 千龍  
日常りのベンチを子守占領し 千賀女  
よく喋舌る子守證據に呼び出さ 一聲  
且さんの顔を初めて子守知り 眠聲  
泣き出した儘に子守は家に来る 吐松子  
東西屋子守ばかりへ一口上 しける  
愛らしい夢を子守は背をつてる 駒人  
玩具屋の世辭に子守はちこ困り 山月  
乳母車子守が乗つて吐られる 叟峰仙  
帯解くミニ子守一錢落すなり 案山子  
乳飲ますそばで子守は帯を持ち 凡平  
子の病氣子守の知つた事でなし 同  
親見せずそつと裏から子守出る 喜泉

お名残りの酒保へ笑顔が寄る 愚劣  
目 句

除隊した翌日前掛させられる

# 關本雅幽 共選 岩崎柳路

○ それさなく子守に言つて返す 同

よく泣く子倅ミニ子守思へごも 一路  
女湯着物擴けて子守待ち 同  
子守でも油断のならぬ噂する 柳人  
當てつけた様に子守は唄ひ出し 同  
飯時刻子守キツチリ歸つて來 わたる  
境内の鳩へいつもの子守くる 同  
暮近く待つ母親へ子守歌 乾坤  
子守歌舌打ちもして搖すり上げ 同  
足袋脱ぎ子守霜焼けかいて居り 廣賀  
くられた蜻蛉子守の肩へくる 同  
泣き子守は馬にもなつて見せ 喜花  
麗さ子守はあんよさして出る 同  
脊の子の躰を聞いて仲間入り 同

○ 吟の他に、雑吟云ふ制度？を知らないか。

## 閑話休題

○ 「雑吟」云へば、番傘の雑吟も、大阪の川柳國も、川柳雜誌の川柳塔も、益々賑やかに、佳吟の續出するのが嬉しい。

○ 雑吟を一通りすつこ目を通す。も一度今度は一句一句賞味して讀んで見る。其の次にも一度さ云ふ様に。何處迄味はへば好いのか、自分乍ら不思議な位だ。

○ 其處に川柳の醍醐味がある。飯よりも好きな原因が成立する。矢張り宗教の一つになつて來る。信仰が湧く。信仰は漸々大きくなるばかりで涯が無い。

○ 川柳を禮讃する。川柳を謳歌する。南無阿彌陀佛を唱ふる老婆の如く、川柳を作つて居ればよい。其處にはつきり三川

バタ／＼と走つて子守叱られる 山美  
 わたねも寝ます子守譽る居る 同  
 紡績の儲を子守チラミ聞き 同  
 冬の陽を浴び子守は編んでゐる 同  
 脊の子を下ろす子守負居す 吐露坊  
 明日の事子守ミ子守決めていに 同  
 子守にも栗島すみ子だミ解り 同  
 八百屋から子守の癖を一つ聞き 同  
 通行人から叱られて居る子守 同  
 姉さんも弟もある子守なり 同

○ 柳路選

くくられた蜻蛉子守の肩へ来る 廣賀  
 繩跳びに子守はいつち後に越ぬ 鳶歩  
 あの子守女給になるミ笑わせる 黙太  
 七三に体を振つて子守唄 千龍  
 其れミなく子守に云つて歸す 喜泉  
 泣き出した儘を子守は家へ来る 吐松子  
 雨の日を淋びしく子守軒に立ち 喜花  
 子守又改札口でからかはれしける

當てつけた様に子守は唄し出し 柳人  
 組見へ子守小さくなつてみる 駒人  
 公休日肩車して家を出る 一聲  
 聞き馴れた歌に脊中の子は眠り 凡平  
 紡績の儲を子守ちらミ聞き 山美  
 子守唄思出ミなる一周忌 乾坤  
 境内の鳩へいつもの子守来る わたる  
 あれもえゝこの柄もねゝ子守連 同  
 あゝやつて遊んでみたい子守 吐露樓  
 脊の子を下ろす子守負居す 同  
 明日のこミ子守ミ子守決ミ去に 同

○  
 (人)八百屋ミ子守の癖をミ聞き 吐露樓  
 (人)祝物子守始めて雷に結び 一路  
 (地)閉捨にならぬ子守は唄歌ひ 柳人  
 (地)子が出来て守置け程暮し向 駒人  
 (天)もう歸る頃ミ坊ミ乳が張り 乾坤  
 (軸)不良性帯びて子守が嫌に 柳路

柳の靈光が湧出して來そうに思へる。

○

頭に映じ、心に寫つた雑念を記した這理屈ではない。私の云ひ分は是丈にしておく。——一四二、二四——

校正室で

▲近頃はよく川柳家の死を聞くやうになつた。自分はこれ位寂しいころもちに襲はれるこゝにはない。いゝ川柳家を一人得るためにきただけ骨を折るか知れないからだ。例令僕の關係の少い人であつても矢張り寂しさにはかほりが無い。向ふでは何とも思つてゐないかも知れないが僕にミつては同志が一人減つたことなるのであるからだ。

▲本號は原稿が澤山あつまつて嬉しかつたが、一方には又載せきれぬためにかなり犠牲者を出さねばならぬ不愉快さをも味はつた(路)



# 柳の床柱

省 二 生

下冊をいたんでもまだ書き残り日本人の生活に燈火趣味は伴はなくてはならぬものであるに、石湯電燈瓦斯燈となつて以來案外冷視された傾向がある最近外國の刺戟で照明研究の叫びが、文化生活の主張に焦点となりつゝあるは喜ばしい現象にて、人間の氣分幸福活動は燈火に支配される言ふも決して過言でない。

天照太神、日の本、皆燈火趣味の實際の現はれでなくて何んであらう、實に建國の大精神の象徴で古事記を繙く時に「火」に吾等の密接さを痛感させられる。暗黒の世界から光明の世界に安住する事は、必ずしもアノ世許りの望みではなく

現世に於ても新人の銀ブラとなり、道頓堀の水に映る火の憧憬ともなる、火事ミナイトレス、オールドの吉原が江戸白慢の花ミ唄はれたのも謂なき事に非らず。茲に燈火の發達史は記さぬ、太古は言はず下つて推古時代即ち佛教渡來の影響に依り百燈の文物が一進歩の階梯をふみ、法隆寺の高燈臺出現となり、尙ほ下つて足利將軍の時勢に金銀閣寺の建築整美につれ、石燈籠と行燈の考案を見た、而して江戸に及びては前代灯器の改良、夫れは嗜好につれた發達、行燈提灯燈籠の完成となり明治時代に至つて行燈は全くすたれ代つて電燈全盛となつたのである。今は特種の塲所外に散見し得ぬ亡びたる

行燈の火の燐を想像せられよ、それは吾等の血管に尙ほ流れて居る一つの趣味ではないか、世界に此種の灯はいくつもあるもの下ない、假りに行燈の形を造り電球を點するも到底浮世繪の雰圍氣に浸る事は不可能だ、アンドンは元行く灯である(日本大辭林アンドンウあんきんさいふ東京なきにて)永正何會合に御僧の寮にもものわすれたりあんきん言海に字は宋音元は携へ行くに用ひたる也こある(アンは行宮、行脚と同じ)即ち往來用に供したわけは、川柳の尤も盛んなりに寶曆天明には室内用として其形狀裝飾工夫され、後代の範を爲した、守貞漫稿に京阪は今も必ず丸形を用ふ江戸専ら角を用ふこある、歌麿が遊女を描く時に好んで行燈を配したのは不夜城の吉原に對して興味を一層深からしめる。

此頃耳新しい研究文字に接した、西山南天子氏の油皿の話である、行灯の極原始的な四角い時代に多く用ひられた油皿そ

れも直接油を入れたらのもなく垂れを受けける下皿の蒐集で、氏は名古屋桑名方面で四十餘枚採られた由、木喰上人研究にて有名な柳宗悦氏の發意にて此の油皿展が催さるるさか、殊に京都の河井寛治郎氏は専門の立場から研究され世に同好の士は少くない様である、南天子氏のお話に因るに、

## 零骨君を悼む

私をはじめて零骨君を知つたのは大正十二年五月三十日本社同人柳路君の大阪の玉川町の宅で小集句會を催した時であつた。句會がすんでから南海食で芋蕨・春坊・彩峰・柳路・私まで大いに川柳宣傳に努めて『食堂』と題する川柳を作句して二時間程快談の後別れたのであつた。君は今後大いに川柳

を作らる事を約束された。六月十一日築港人事館で初めて舊以交吟社の句會に列席せられてからその後數十回川柳のために會合したのであつたがいつも熱心に句作し又職務上に於ても部下を愛し仕事には絶密で責任を果たして居られた。君は昨年の夏から非常に健康を害されていつも私の達者なのを羨んでる

た。その間十ヶ月で大正十三年八月下旬病床についてから本社の同人をやむなく退かれたが川柳に對する白熱さは死ぬまで持つて居られた。昨年十一月二十一日に逢つたのが君との永遠の別れであつた。

名吟を残し零骨死んだのか 二柳子  
世九ミ思はなかつた若死し 同

橋 本 二 柳 子

(一) 形状多く丸形差渡し八寸位扁平但青樂には四角分銅形其他あり、  
(二) 時代天保頃から遡つて百五十年前  
(三) 模様——山水尤も多く一本松柳帆船笹の雪唐草等大津繪趣味のもの  
(四) 製作——不思議なるは之程各地に亘つて擴がつてゐる品物が單に瀬戸竈のみ

に於て焼けた事です。こある。行燈に關する斷片的の調査蒐集俱に行燈全體の保存も決して閑仕事ではない、誰也あんさう、地口行燈八間懸行燈にわかあんさう器行燈行燈萬燈其他種類はまだあり、今や寄席や芋屋の看板行燈に小さい形を残すのみでは遺憾である。

# 柳風スポーツ (その二)

森 東 魚

ころんでもつかむが外野命也  
ゲットツト、コーチ狐の落ちたやう  
およばねの智恵もシングルちつこ借り  
ハイダイブ翼のほしき姿也  
西瓜みる所作もラゲビーありはあり  
デイスカスは巴になるこおツ飛ばし  
流れ星ほぎにジャブリン空を縫ひ  
兩杖ミ云へばスキーもちゝむさし  
咽喉佛見せてボールは飛んで来る  
雁首のさきでホツケー峠をあけ

✦ 井 上 信 子

看護婦に云はれ素直に寝る心  
雪晴れに雪もベツトも陽が當り  
子を抱いて疲れたほぎに瘦せた父

# 無 題

蛭 子 省 二

家内中顔見合せる冬の蠅  
毒消にひけ人蔘をつまみ込み  
物指で教へて呉れる二の替  
温泉の内緒話は産む氣なり  
あこつけてくる妻の風流  
月日重ねて土ミなる戀  
男嫌ひか伊豫緋買ふ  
本性あつてはづすお座敷  
袂から狙俵の好きな豆を出し  
貧乏を團扇の裏に書てみせ  
言譯けのかん高になる蠅たゝき

✦ 武 笠 山 椒

性慾の整理と息子ぬかしたり  
疊がへさせたし値上げおそろし  
よんごころ無い善人は教育家  
善人だ彼奴はだめミ政黨屋

# 編輯後の小集

八日の朝早くから編輯にかゝる。夜に入つてから小集を開らいた。「双児」父の死の二題を課し近來にない緊張した作句氣分になつた。散會午前一時。(路)

双 兒

色白に生れて双兒よく目立ち 霞之女  
 惚きみれば双兒の似て居らず 莢豆  
 別々に一兒の顔も世帯染み 雅幽  
 一ヶ月早う生れた双兒なり 二柳子  
 双兒の名一寸うろたへ氣味で 路郎  
 夫婦して双兒の將來を案じ出じ 馬行  
 問ふ奴を野暮にしてゐる双兒 同  
 体重が追ひつ追はれつ双兒なり 同  
 來客へ双兒きちんと手を仕へ 松郎  
 あれ双兒やでミ仕事の袖を引き 同  
 判決の其日双兒へせまつて來 同  
 老眼をかけて双兒を見比べる 刀三  
 別々な人生觀を双兒持ち 同  
 いさかひを双兒は父へ持つて來る 同

父の死

遺言のない父の死をさびしがり 二柳子  
 さはされざ父死せば思ひ得ず 莢豆  
 父死んでからの兒貴も度胸あり 雅幽  
 父の死に世界半分丈まわり 同  
 非業の死さけた父は思はれず 芭乃女  
 父は生きてゐたらう海の音 同  
 父の死に似るかミ母は苦勞がり 同  
 父の死に天井のさがる思あり 馬行  
 父の死が第一線に繰り出させ 同  
 父親の死が丸刈にさせました 同  
 今日からは父の代りぞ長火鉢 同  
 長男に父の死骸のうらめしく 同  
 死んでから知る父の貧しさ 刀三  
 親類へ馬鹿を頼んで父は死に 同  
 父死んで酒屋の掛けが滅て來た 同  
 亡き父のふけを落してゐた姿 同  
 晒風へ頼んだまゝで父は死に 同  
 強情のまゝ父は死したり 同  
 父の死後また柿が成り柿が成り 松郎  
 すまないなくミ父死んで行き 同  
 父在りし日の思ひ出は釣りのこ 同  
 父死んで伯父兄弟に改まり 同  
 父死んでへちまの垣もうらみなり 同  
 父の死後記者こいふのは來なり 同  
 父の死に戀人も來てくれる也 同  
 父の死へ懐ろ手して叔父の來る 同  
 父の死を知らせに行つて腹を立て 同  
 父死んで隣のけぶる日の多し 路郎  
 父の死後轉々さして落ちてゆく 同  
 父の死後墓廻にして人に逢ひ 同  
 父の死にわれ文學へ志し 同  
 父の死に郊外の家見つけて來 同  
 父の死後父をつくりのあそび 同  
 父の死に妾になつたまでのこ 同  
 父の死後忘れられてる徳利なり 同  
 父の死後たまさか易母となり 同  
 仕立物致しますも父の死後のこ 同  
 父の死に父の巾帯しめてゐる 同  
 父の死にも給仕にあまんじ 同  
 父が死んで算盤を持つ今日僕 同  
 父の死で忽ち藝者一人出來 同



# 近作柳樽

路郎選

ハイく言ふ牡丹刷毛忙しさう	旭川志背南	物指の端して寢た子の蠅を追ひ	同
隣からも湯上りの來る涼み臺	同	手の數に餘る玩具を持ちたがり	同
出戻りは氣不味く花見して歸り	同	恍惚ミ木魚を聞いて又眠り	同
つり錢が無いミ出札言ひ放し	同	灰色の暮らし生きんミするのです	同
赤貧の中にませてく女の子	同	お妾の方へも嫁ミして仕へ	同
繭柄の細くなるのを淋しがり	同	春にまた寄せて貰ふミ別れたり	大阪東城子
たくはへた涙を里へ泣きに來る	同	敵娼は俺へばつかり酌をする	同
死んで行く譯を子供に聞かれたり	同	あの馬鹿に何が出来るミ男親	同
藝よりも強い美貌を持つてゐる	同	空馬車の馬憂々ミ機嫌よし	同







## 編 輯 後 記

四三天野方へ轉居されました。そして近日上阪するご云つて來ました。一日も早く上阪されん事をお待ちして居ます。

○本誌發刊當時から多大の御盡力をして下さいました竹田蘆穂氏が今回家庭の事情で一時同人を退かれる事になりました亦武丑彩霞氏も暫く同人を退きたいご云つて來られました。誠に名残の惜しい次第です。共に復活をお祈りします。

○本號に武笠山椒比が御寄稿下さいました「本事川柳」は引續きお書き下さるそうですから御愛讀をお願ひいたします。

○宮武ハ骨氏は「變態知識」の完結と共に明治奇聞集を出して居られます。誠に面白くものです。おすゝめ致します。

○同人佐々木默闇比の御家庭に御不幸があつたさうです。お悼みいたします。

○かねて入院の左和右半氏は去る二月二十六日、藤井小波氏は一月廿八日に長逝されました。爰に厚くお悼み致します。

○俳句雜誌「同人」主幹青木月斗氏の御令

息月磨君が去る二月十六日に亡くなられました。この所よりお悼み申上ります。

○松江の青砥不二綱氏去る二月下旬來阪寄骨追悼句會にお出席されました。

○山口吐露坊氏は吐露樓に、和歌山の久樂氏は南音に、共に改號されました。

○煙川柳會の「煙」は近日出るさうです前號發表募集吟課題「朝風呂」の締切は三月廿五日の誤りでした。更に努力して下さい。

○川柳に熱心な松郎君が大坂府立圖書館の藏書目録中の川柳が「狂句」にして分類されてあるのを甚だ遺憾とし「川柳」に改められるやうに交渉してゐます。

○本號の編輯は主幹三松郎、莢豆、刀三雅幽、二柳子と私とでいたしました。編輯後別項の通り小集會をしました。

○本社三月例會は十四日午後六時から大阪南區清水町端の坊で開催いたします兼題「堀」五句路即氏選です御出席を歓迎いたします。

(馬行生)

○三月の聲と共に日に／＼暖くなつて行くやうです。句會に小集に我々のシーズンになりました。主幹の病氣も昨今は非常に良い方で、もうその中に全快せらるゝ事さ同人一同喜んでゐます。病中の方々のより親切なるお見舞を戴きました方々にこの處より厚く御禮申上げます。

○同人竹内多聞氏 去る二月七日、目出度結婚式を挙げられました。お祝ひ申上れます。

○同人宗清夜調氏今回、廣島市西大工町

▼本を漁つて歩くことは私の  
楽しみの一つだ。古本屋の棚  
の上から下まで、端から端ま  
ですつと目を通しますと、軽  
い疲れを覚えます。しかしこ  
の疲れは私のやうな古本屋巡  
りをするものに取つては實に  
愉快な疲れであります。

▼この疲れを覚えた時腰をお  
ろして話と込めるやうな家の  
あることはたまたまなく嬉れし  
いものです。

▼公立社の主人公は、そんな  
時にいつでも心よく椅子を提  
供してくれる人です。諸君も  
私と同様に此處の主人公にお  
なじみになつて下さい。

▼商賣の方でも充分勉強して  
くれますから安心していゝと  
思ひます。まだおなじみでな  
い方は是非一度立寄つてあげ  
て下さい。(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六

## 投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するべし。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記するべし。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこゝ。

## 募 集

### 第二卷第五號課題

三月廿五日締切  
(各題二十句以内)

- ▼履歷書 森 東 魚選
- ▼盃 竹 田 蘆 穂選
- ▼朝風呂 林田 馬行 共選  
太田 一 聲

### 第二卷第六號課題

四月廿五日締切  
(各題二十句以内)

- ▼埃り 伊 東 夜 及 郎選
- ▼洗濯 高 橋 古 城 山 選
- ▼逢り 塚 崎 松 郎 共 選  
森 田 輝 翠

### 每 號 募 集

- ▼近作柳檉(句數無制限) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報) 編輯局選
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

## 價 定

一部	參拾錢
六部	壹圓六拾錢
十二部	參圓

(共稅郵)

## 料告廣

特等	一頁	拾
普通	一頁	拾
五號	一行	貳
貳	貳	拾
圓	圓	圓

▼御送金は掃替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりご御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年三月十日印刷  
大正十四年三月十五日發行

第二卷 第三號  
(毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎  
大阪市東區農人町二丁目七番地  
印 刷 所 藤 本 兄 弟 社  
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發 行 所 川 柳 雜 誌 社  
振替大阪三一五一四番

店書捌賣  
(大阪) 明文堂 公立社 柳 屋  
(東京) 東 條 (京都) 三 宅 (神戸) 米 田  
(金澤) 石 井 (松任) 三 須 (函館) 石 塚

# 川柳雜誌社同人 (いろは順)

主幹 麻生路郎

岩崎柳路 井上刀三  
 原史風 林田馬行  
 橋本二柳子 二木幸堂  
 西垣松雨 徳田双柳  
 龜井花童子 太田一聲  
 太田徹底郎 高橋かほる  
 高橋古城山 高見柳骨(入警中)  
 竹内多聞 塚崎松郎  
 宗清夜調 黒木莢豆  
 矢田右大臣 柳川洲馬  
 松本助六 駒井美の作  
 麻生葭乃 佐々木黙閣  
 宮内一洲 平井光太樓  
 森田輝翠 關本雅幽

- 第一支部
- 第二支部
- 第三支部
- 第四支部
- 第五支部
- 第六支部
- 第七支部
- 第八支部
- 第九支部
- 第十支部
- 第十一支部
- 第十二支部
- 第十三支部
- 第十四支部

大坂市西區八條通南小路 幹事 橋本 二柳子  
 大坂市北區南同心町二丁目四五〇 幹事 原 史風  
 岸和田市下野町四一九 幹事 太田 一聲  
 大坂市西區龜町四丁目十三號地嵐山方 幹事 關本 雅幽  
 大坂市東區餌差町二二一番地 幹事 駒井 美の作  
 兵庫縣武庫郡六甲苦樂園 幹事 佐々木 黙閣  
 大坂市外南濱一八二 幹事 西垣 松雨  
 神戸市旭通二丁目八三 幹事 宮内 一洲  
 山口縣山口町石原小路 幹事 柳川 洲馬  
 東京芝區愛宕町一ノ六大成社内 幹事 岩崎 柳路  
 函館市青柳町五〇 幹事 龜井 花童子  
 大坂市外平野郷梅ヶ枝町五丁目 幹事 松本 助六  
 朝鮮仁川仲町二丁目八 幹事 矢田 右大臣

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一週十五日發行)  
 大正十四年三月十日印刷 大正十四年三月十五日發行

第二卷 第三號

定價金參拾錢